

2 大友氏館跡 第35次調査（概要）

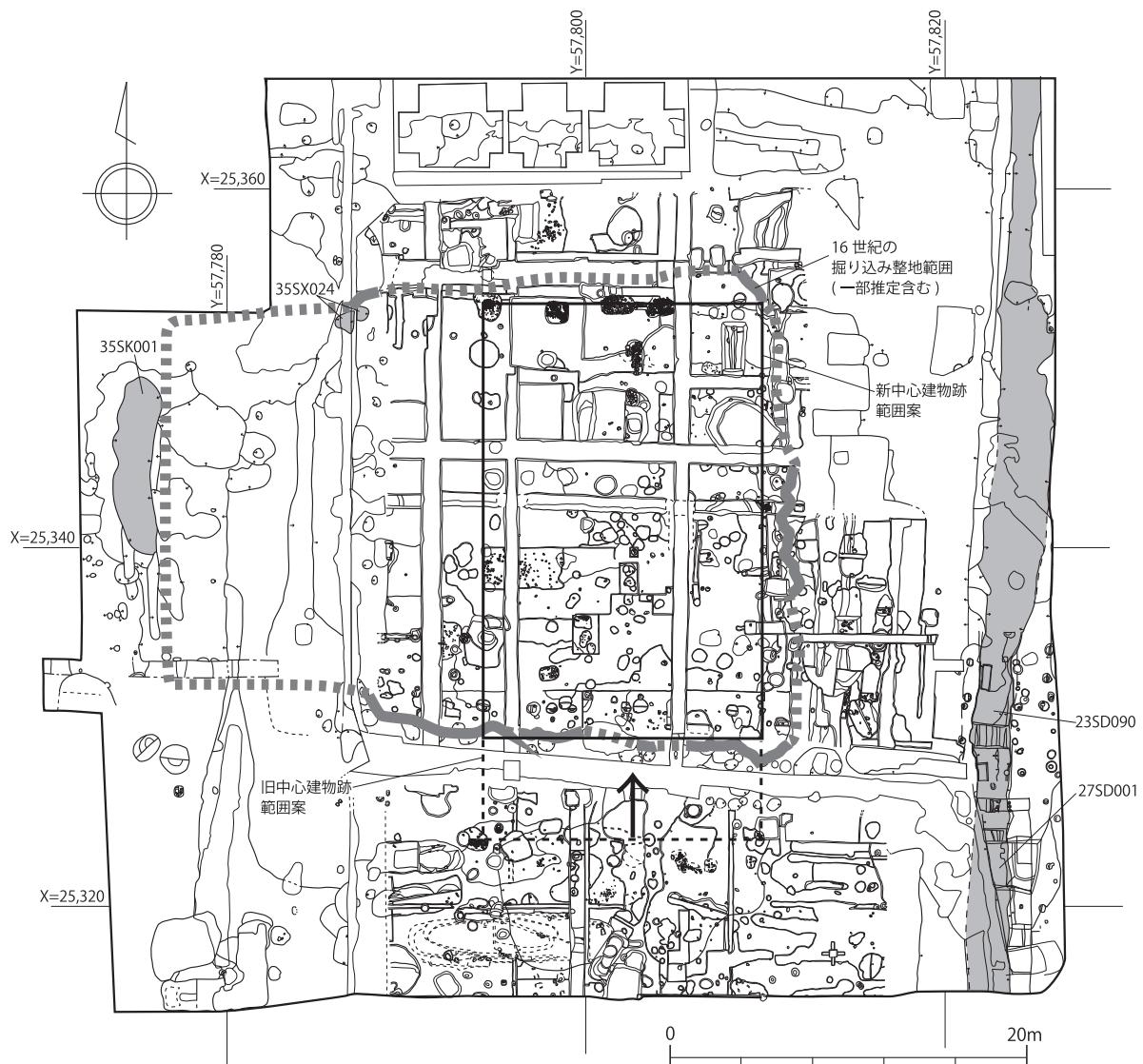
調査面積 2,754 m² 調査期間 16.12.26～17.3.17 地域 A 調査担当 五十川雄也

1. 調査の概要

調査区は大友氏館跡中心建物域にあたる。（第5図 大友氏館跡調査地点位置図を参照）館35次調査の目的は3点である。まず1点目に、館V期段階（16世紀後葉～1586年）の中心建物跡南辺の確認をすることである。これまでには南辺周辺に未調査地があったため、中心建物跡の南辺は推定の域を出なかった。中心建物跡南辺については、調査の結果、礎石痕と推定される遺構が新たに確認された。また、中心建物跡南側の掘り込み整地南限の痕跡も確認されたことから、中心建物跡南辺はこれまでの南辺案よりも北側に短くなりそうである。

2点目に16世紀代と考えられる中心建物に伴う掘り込み整地の範囲確認をすることである。中心建物に伴う掘り込み整地については断面観察などにより、中心建物跡南側、東側、北側については概ね範囲が明らかとなった。しかし、西側については近世以降の水田掘削により大きく削平を受けており、検出できなかった。ただし16世紀中頃～後半のかわらけ廃棄土坑（館35SK001）が中心建物跡西辺の約17m西側で確認されたことから、この土坑より西側に、掘り込み整地などが延びる可能性は少ないと考えられる。

3点目に、中心建物跡周辺での館V期段階の新たな遺構の確認である。まず中心建物跡東側で、以前部分的に確認されていた南北方向の区画溝（館23SD090、館27SD001）の延長が確認された。さらに中心建物跡西側で、円礫・拳大礫を含む土坑状の遺構（館35SX024）が検出された。この遺構は中心建物跡北辺で確認されている礎石痕と考えられる遺構に近似している。中心建物跡西辺と館35SX024は約6m離れているため、中心建物跡の一部というよりは、中心建物跡とは別に、西側に付随する建物跡の可能性がある。（五十川）



第7図 大友氏館中心建物跡周辺図 (1/400)

3 大友氏館跡（庭園域：園池跡）調査

調査面積 約 120 m² 調査期間 17.8.16～17.9.1 地域 A 調査担当 佐藤道文（史跡整備担当班）

1. 立地と環境・調査の経緯

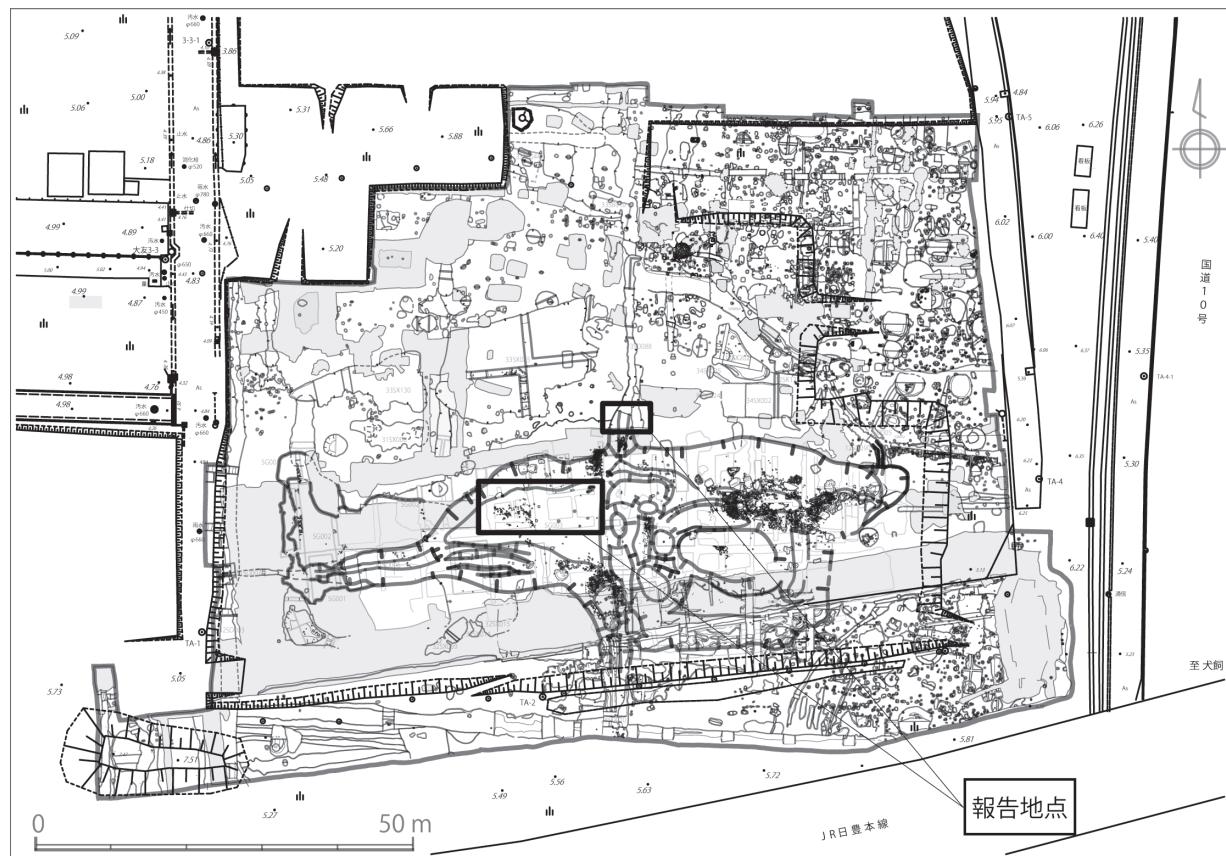
調査区は大友氏館跡南部に位置する庭園域にあたる。（第5図 大友氏館跡調査地点位置図を参照）大友氏館跡庭園域の遺構の状況把握等を主眼とした確認調査は、平成28年度に刊行した確認調査報告書『大友氏館跡2』をもって終了している。

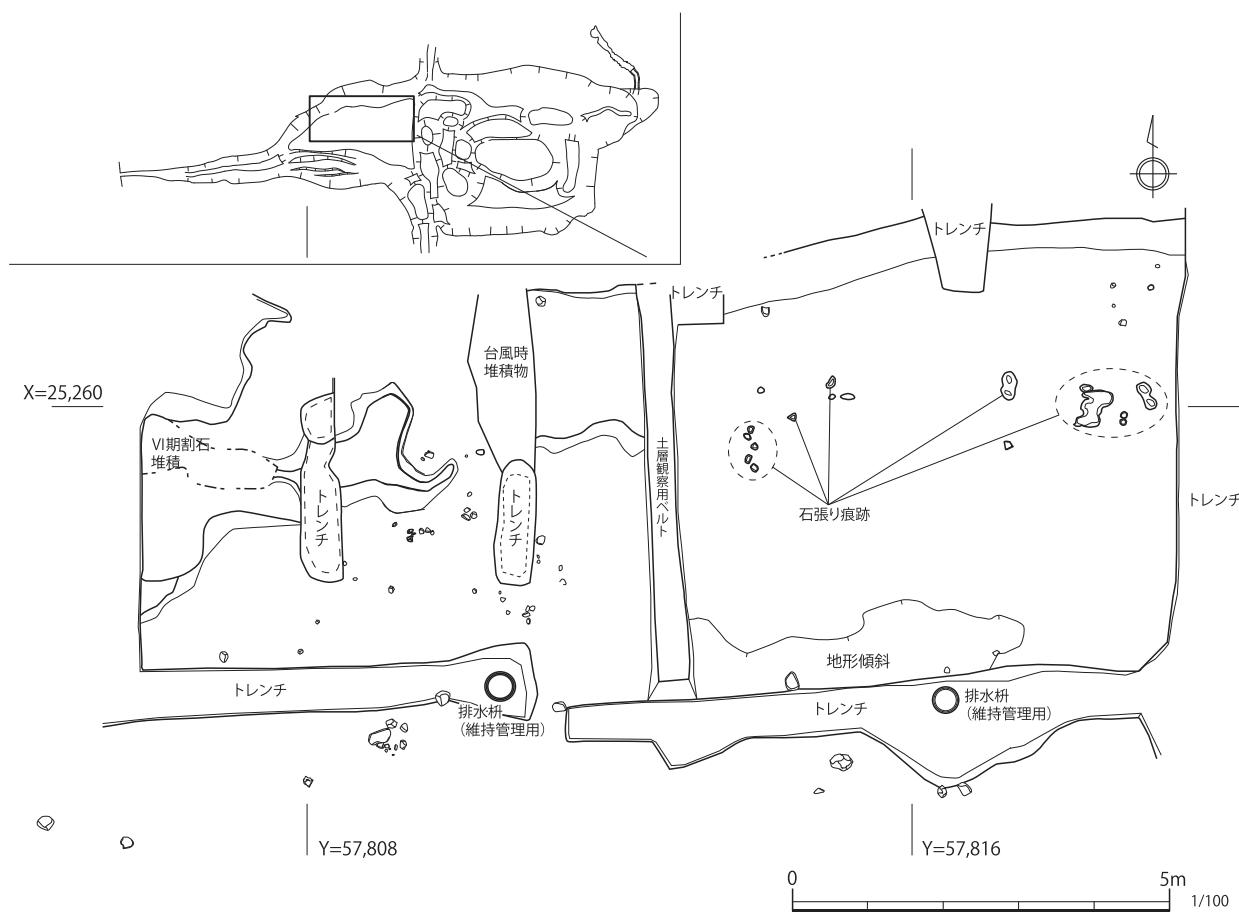
今回の調査は、園池跡（SG003）西部底面の一部及び北溝（SD088）の園池部との接続部分において、庭園廃絶後の堆積物（割れ石や埋土）が復元整備にむけて設計作業を行う中で復元整備高に影響をきたすことが改めて確認されたことから、一部除去を行ったものである。特に、園池跡内西側は可能な限り遺構保護層を薄く設定するという復元整備方針を示しているため、館V期段階の底面の表出までを目的とした。また、SD088においても保護層の調整地点となるため、極力新しい時期の堆積物を除去することとした。

2. 調査の概要

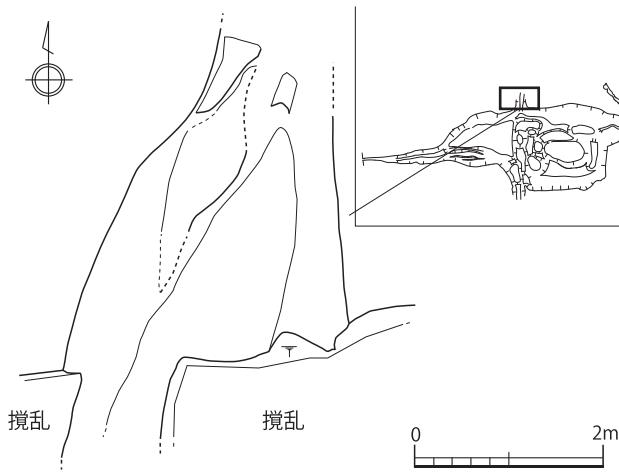
SG003の西側では、廃絶以後の堆積物を除去すると、池として機能していた段階（館V期）の粘土が全面に貼られた底面が確認された。堆積物の中には安山岩の破片が多く含まれており、現在確認されている庭石以外にも置かれていたと考えられる。底面は池北斜面部から緩やかな傾斜をもち、底面中央付近で窪む形状を呈す。また、底面表層では細かな凹凸が認められ、周辺には部分的に園池の底石が残存しており、状況から石が貼られていた痕跡であると推測される。貼られた石は概ね10～20cmの範疇の大きさで、玉石や円形を呈すものが主体を占める。SD088では、掘り下げ部の南延長地点で溝底面に石が貼られていたため、その連続する様子が確認されることを想定していたが、その痕跡は全く見当たらず、よって石貼りは園池との接続地点に限定されていることが確定できた。埋土中からは瀬戸美濃産の天目茶碗が出土している。

その他、補遺ではあるが園池跡西側の廃絶後の埋土から、第11図1～3が出土した。1・2は中国吉州窯系の瓶の破片である。3は犬形土製品で、高さ3.8cm、長さ4.45cm、幅2.1cm、胎土は精製土で、右後ろ足、尻尾部を欠損している。（佐藤道文）





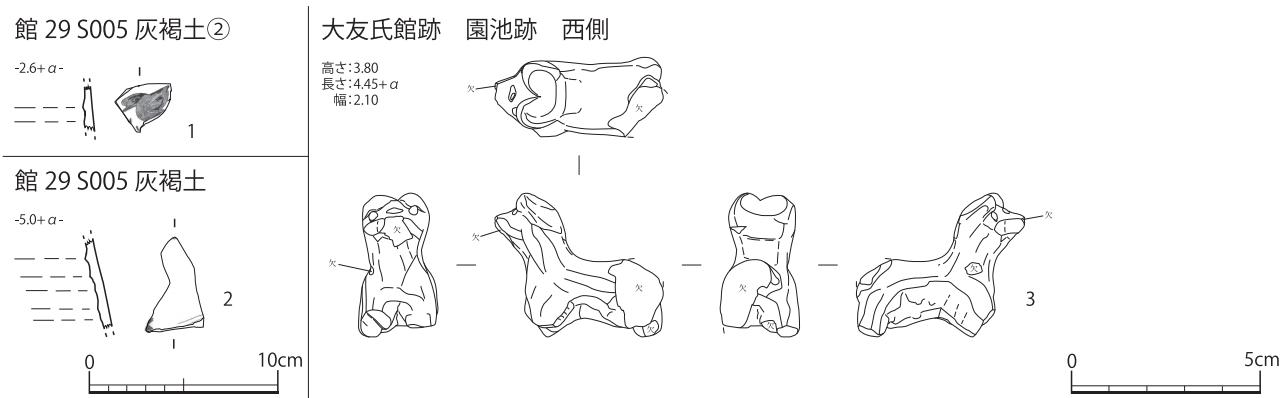
第9図 SG003 堆積物除去後実測図 (1/100)



第10図 SD088 追加掘り下げ部 実測図 (1/80)



SD088 追加掘り下げ部 (全景: 南から)



第11図 出土遺物実測図 (1/2・1/4)

4 城原・里遺跡 第18次調査（概要）

調査面積 420 m²

地域 F

1. 調査の経緯・立地と環境

城原・里遺跡は標高 40 m の城原台地の東部に位置している。当遺跡では、東部の「里地区」で 7 世紀後半に比定される初期の官衙関連遺跡、西部の「城原地区」においては海部郡衙政庁の一部と考えられる建物群が確認されている。

第18次調査は、平成28年度の市内重要遺跡確認調査の一環として実施したもので、「城原地区」で確認された海部郡衙政庁跡と考えられる建物群の東側に位置している。対象地内では古代に属する遺構の範囲確認を目的として、平成22・24年度に第13・14次調査が行われている。過去の調査の結果、古代から中世に属する柱穴群が確認されているが、海部郡衙に関連すると考えられる遺構は検出されなかった。

2. 調査の概要

今回の調査は海部郡衙政庁跡に付属する遺構分布の把握を目的として、2016年11月21～26日に実施した。調査は3ヵ所のトレンチを設定して行った。検出した遺構については、時期の検討のために遺構の一部掘り下げと遺物の取り上げを行った。その結果、古墳時代のものと考えられる須恵器や土師器、竪穴住居跡、ピット群が確認されたが、明確に古代と特定できる遺構は確認できなかった。

18-1区は、第14次調査1トレンチの北側に設定した。規模は 10.3 m × 20.8 m で、面積は 214 m² である。地表から遺構検出面までの深さは 0.3 ～ 0.5 m である。遺構としてピット群が確認された。これらの遺構は古墳時代の土師器片が多く出土する暗茶褐色土（第3層）上面で検出しておらず、遺構埋土はいずれも暗茶黒色土を呈している。東西方向の柱穴列を2本、南北方向の柱穴列を1本確認したが、それに伴う遺物の出土はなく、時期は特定できなかった。



第13図 調査区位置図 (1/2000)

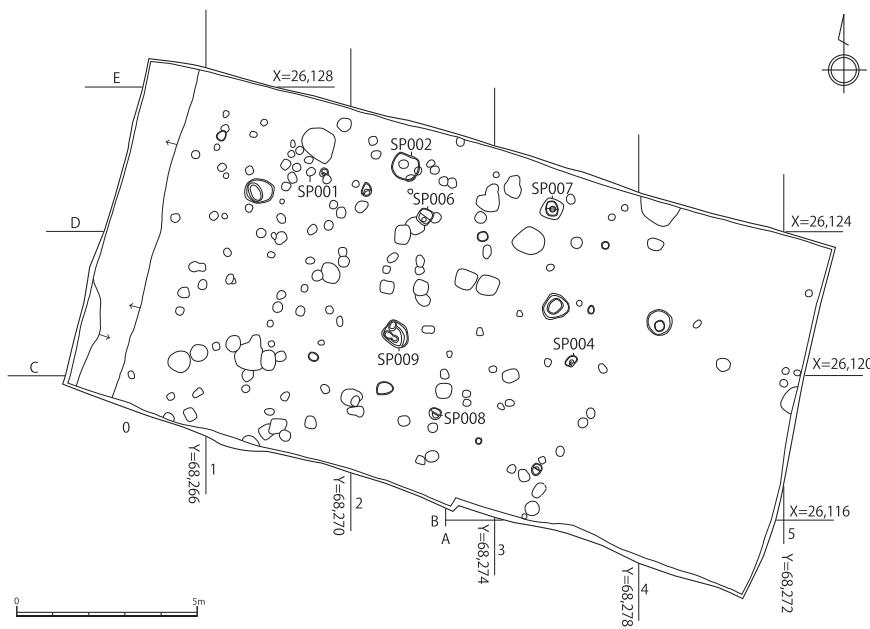
調査期間 16.11.21～16.11.30

調査担当 小野綾夏・留野優兵・福永素久

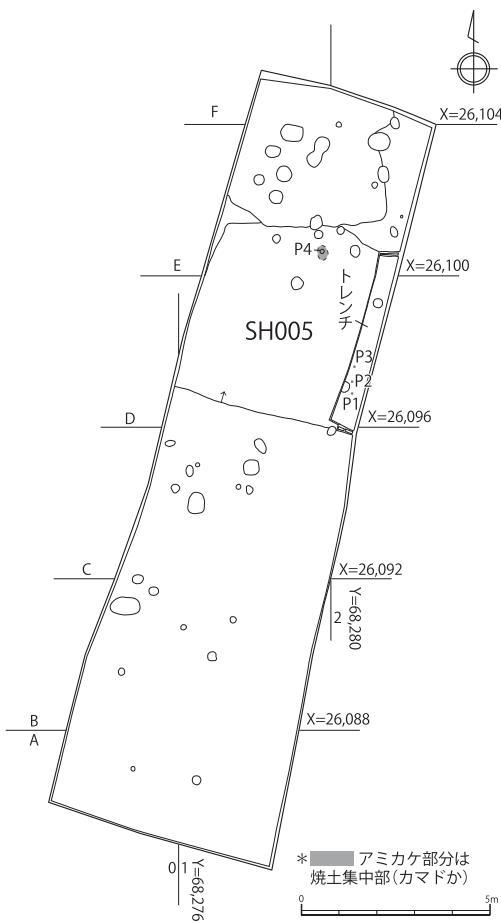


第12図 調査地点位置図 (1/5000)

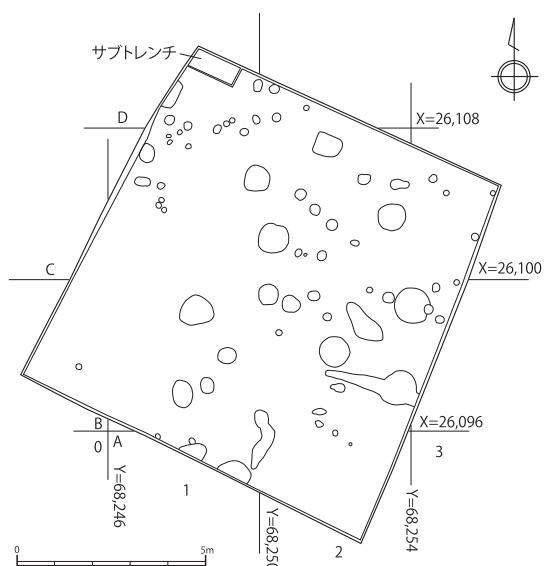
18-2区は、第14次調査2トレンチの東側に設定した。規模は 5.6 m × 19.9 m で、面積は 111 m² である。地表から遺構検出面までの深さは 0.3 ～ 0.5 m である。検出された遺構は竪穴建物1基、不明遺構1基、ピット群である。遺構は調査区の北側に集中する。竪穴建物跡（SH005）は東端部が調査区の外に展開しているため全形は確認できないが、隅丸方形を呈するとみられる。規模は南北 5.1 m × 東西 5.0 m 以上で、サブトレンチを設定し掘削を行ったところ、遺構深度は約 0.2 m を測り、周溝が確認された。遺物は滑石製の紡錘車（第18図3）、砥石（第18図5）、須恵器（第18図2）などが出土している。また、検出時に住居のカマド跡と推定される焼土の集中部を確認し、その上部で土師器の甕片を採集した。甕片を取り上げて焼土を掘り下げたところ



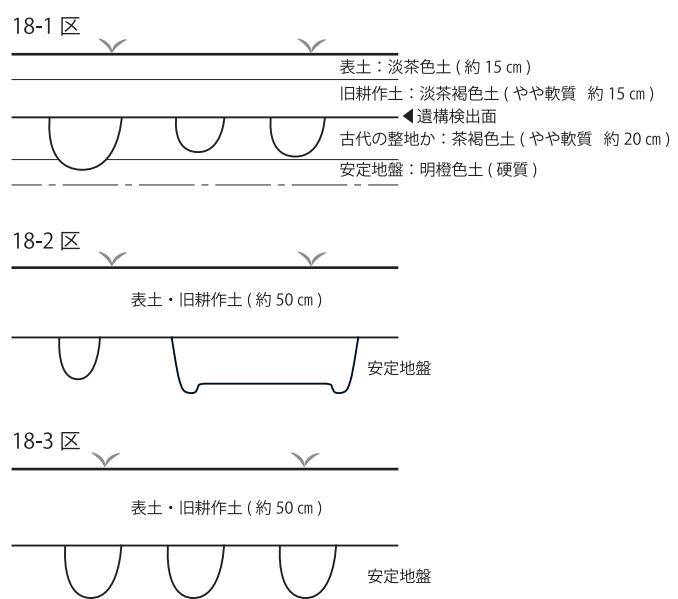
第14図 1区遺構全体図 (1/200)



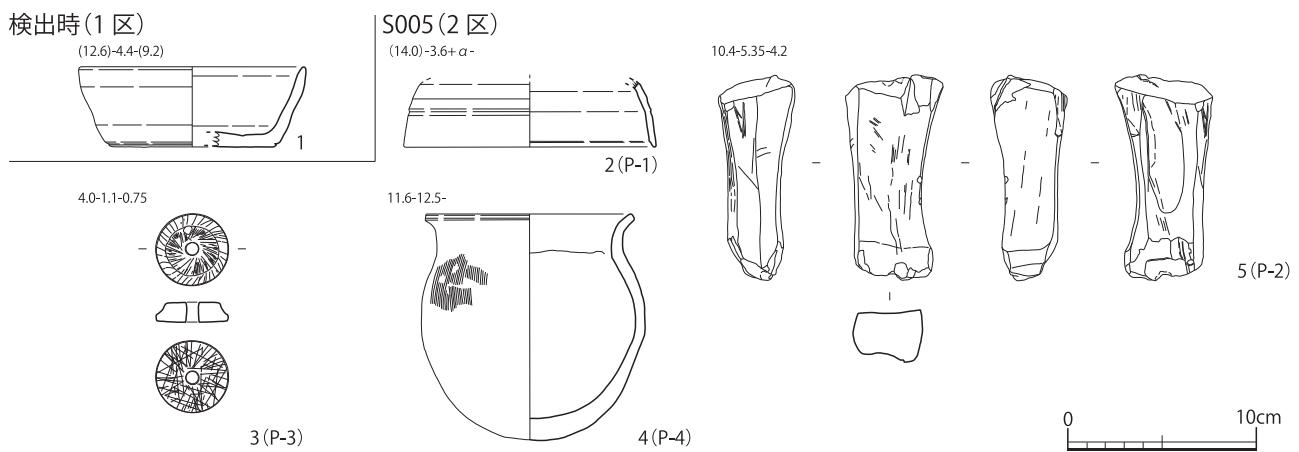
第15図 2区遺構全体図 (1/200)



第16図 3区遺構全体図 (1/200)



第17図 土層模式図



第18図 出土遺物実測図 (1/4)

ろ、小型丸底甕（第18図4）が上下逆に埋置された状態で発見された。これらの状況から、SH005の時期は6世紀前半～中頃と推定される。

18-3区は13次調査区の南東側に設定した。規模は9.6m×9.9mで、面積は95m²である。地表から遺構検出面までの深さは0.5mである。土坑やピットが検出された、ピットの分布は不規則で柱穴列は確認できなかった。隣接する13次調査区でみつかったような竪穴建物跡などの大型遺構は検出されておらず、遺構の分布が希薄になっている。出土遺物は検出時に採集した土器の小片のみである。

3.まとめ

第18次調査区では、2区において古墳時代の竪穴建物跡、1・3区ではピットや柱穴列が確認された。ピットと柱穴列は、遺物が出土しておらず、柱穴の並びに規格性が見られないことから、郡衙に関連する施設とは考えにくい。こうした事から、政府跡から東側では、古代の遺構や遺物の分布が希薄であることが考えられる。

本市は、第2次調査で海部郡衙政府跡が確認されて以来、周辺に存在すると考えられる「正倉域」などの郡衙関連施設の確認を目的に調査を行ってきた。しかし、郡衙中枢域東側に隣接する地点では、郡衙に関連する遺構の発見には至っていない。（留野）



第18次調査地点遠景（上が北）



2区調査区全景（上が西）



1区調査区全景（上が北）



3区調査区全景（上が北）

5 城原・里遺跡 第19次調査（概要）

調査面積 100 m²

地域 F

1. 調査の経緯・立地と環境

城原・里遺跡は標高 40 m の城原丘陵の東部に位置している。当遺跡では東部の「里地区」で 7 世紀後半に比定される初期の官衙関連遺跡、西部の「城原地区」においては海部郡衙政庁と考えられる建物群が確認されている。

第19次調査は平成28年度の重要遺跡確認調査の一環として実施したもので、調査地は「城原地区」で確認された海部郡衙政庁跡と考えられる建物群の西側に位置している。対象地内では古代に属する遺構の範囲確認を目的として、平成19・26・27年度に第11・16・17次調査が行われている。これらの調査では古墳時代の竪穴建物跡や土坑、溝状遺構、ピット群が確認されているが、古代の遺構や遺物はほとんど確認されていない。

2. 調査の概要

対象地内の古代の遺構の分布範囲を確認することを目的として調査を実施した。調査トレンチの規模は 5.2 m × 19.9 m で面積は 103 m²を測る。検出した遺構の掘削は時期の推定に必要な遺物の回収を目的とした一部にとどめている。地表から遺構検出面までの深度は 0.3 m で、遺構には竪穴建物跡 2 基、ピット、不明遺構などがある。

調査区の北側で検出された竪穴建物跡 SH005 は、調査区外に展開しているため全形は確認できていない。形状は隅丸方形を呈し、南北方向の長軸は 4.9 m を測り、周溝や柱穴を伴っている。調査区の中央で確認された竪穴建物跡は、後世に形成された遺構によって破壊されているため全形を把握できていない。この竪穴建物跡を切る遺構には焼土が

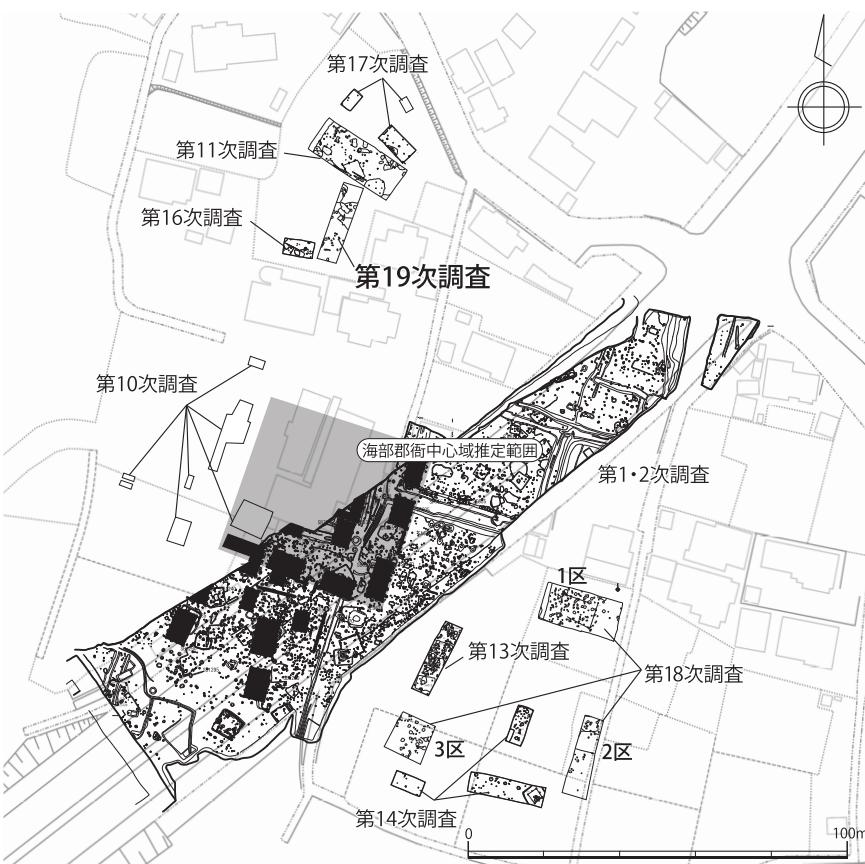
集中する部分が確認されているが、これが竪穴建物跡に付属するかどうかは不明である。調査区内で出土した遺物は小破片が多く、詳細な時期を推測することはできなかった。

3.まとめ

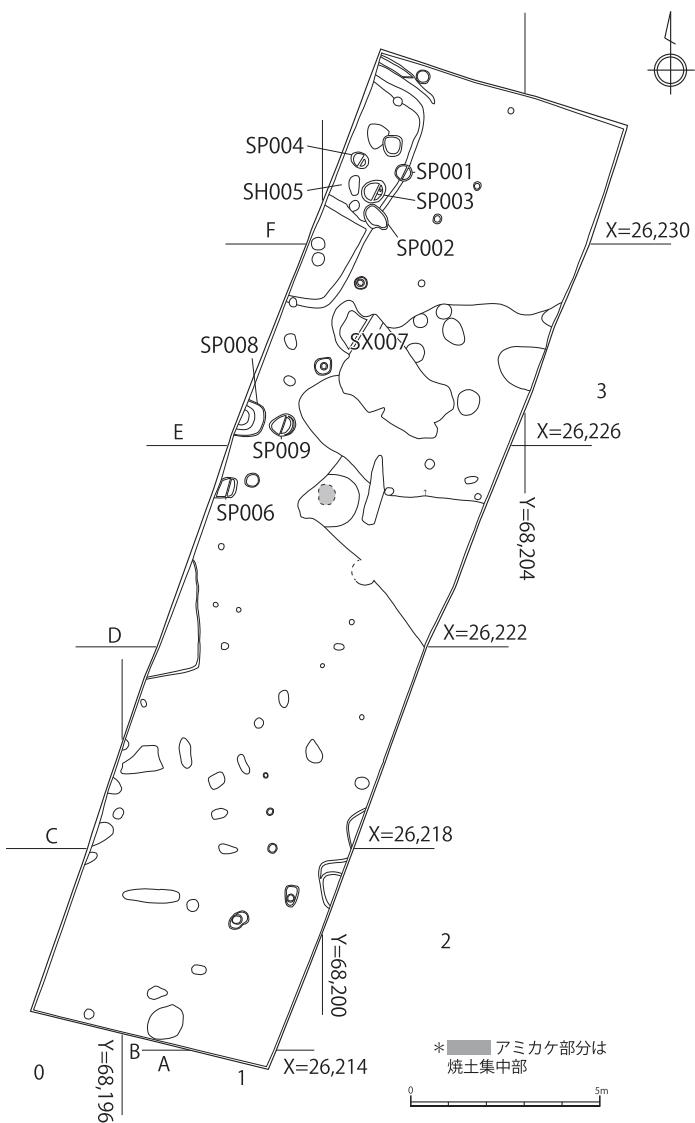
第19次調査は、先行調査と同様に竪穴建物跡やピット群が展開する状況であり、対象敷地内で行った4回の調査結果より、古代の官衙に関連する遺構や遺物は検出されなかった。今回の第18・19次調査の成果より、海部郡衙の中枢域は、確認されている位置から広がることはないと考えられるが、今後は、城原地区と里地区の間など周辺域へ調査地点を変えて中枢域に関連する遺構の確認調査を実施していく必要がある。（留野）



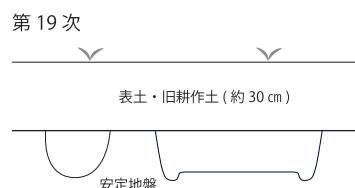
第19図 調査地点位置図 (1/5000)



第20図 調査区位置図 (1/2000)



第 21 図 遺構全体図 (1/150)



第 22 図 土層模式図



平成 28 年度調査地点周辺 (東より)



調査区全景 (南より)



調査区全景 (北より)



SH005 検出状況 (東より)

6 上野大友館（上原館）跡 第8次調査（概要）

調査面積 63 m²

地域 A

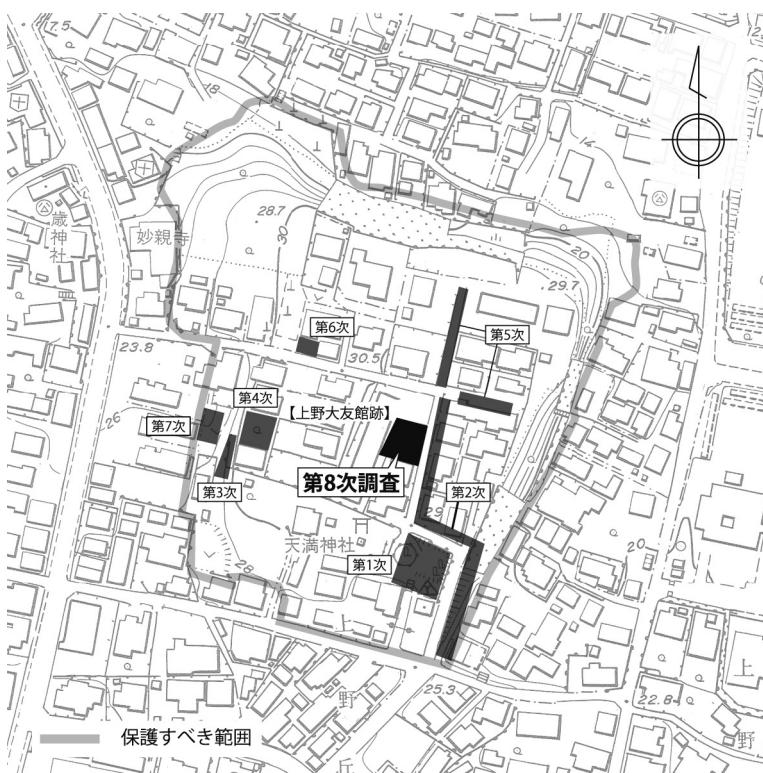
1. 立地と環境

上野大友館跡は上野台地上に位置し、平成26年10月6日に大友氏遺跡として国指定史跡に一部が追加され、現在では今後保護を要する範囲となっている。また、大友氏の館として周知され、現在でも「御屋敷」の字名が残る。形状は南北の長さ約156m、東西の長さ約112mのやや南北に長い長方形を呈し、土塁や北西部にある郭状の張り出し部をみることができる。館の四方を廻る土塁や一部に堀が残ることから、顯徳町に所在する大友氏館とは性格や機能が異なる館跡である。上野大友館跡では、これまでに7カ所の地点（第24図・第3表）において調査を行っており、大きな成果として15世紀末～16世紀中頃の水平に堆積した積み土と16世紀後半頃の斜堆積の積み土や、8世紀頃の遺物が出土する古代の整地層などを確認している。

今回の調査は、個人住宅建設に伴って行われた確認調査である。調査地点は、上野大友館跡内に位置しており、館の施設等関連遺構の確認を目的として調査を実施した。なお、2016年度までは上野大友館跡という周知遺跡名と上原館跡という史跡名が混在していたが、2017年度より遺跡名も上原館跡と統一している。今回の調査は2016年度実施のため、文章内は上野大友館跡で揃えている。

2. 調査概要

確認調査は、対象敷地内に南北9m、東西7mの調査区を設定し、現地表面から遺構が検出される深さ約0.5mまで重機による掘削を行い、遺構の検出作業を行った。遺構の調査については、遺構検出を行った後に図面や写真などの記録作成をし、遺構の掘り下げについては一部のみにとどめている。調査の結果、現地表面から約0.5m下で古代の土師器片を多く含む暗茶黒色土（整地層か）が確認できた。出土した土師器片の時期は、概ね8世紀～9世紀に帰属することが考えられる。その上面で遺構の検出作業を行ったが、遺構は皆無であった。さらに、サブトレンチを設定し一部整地層の掘り下げを行うと、明黄褐色土（安定地盤）上面において遺構を検出することができた。それらの遺構からは土師器片が出土しているが、小破片のため時期の特定には至っていない。調査中には、中世の遺構は確認できなかったが、表土や現代の搅乱からは、京都系土師器片などの中世の遺物や、その他に8世紀の須恵器坏片（第27図1）、格子目のタタキがある丸瓦片（第27図2）などが出土している。



第24図 調査区位置図（1/3000）

調査期間 16.12.5～16.12.9

調査担当 小野綾夏・留野優兵・福永素久



第23図 調査地点位置図（1/5000）

3. まとめ

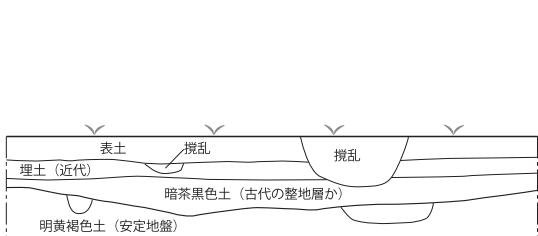
今回は個人住宅建設に伴い確認調査を実施したが、住宅の基礎が遺構検出面に達することはないと遺跡の保存を図ることができた。調査により、館内部には、8世紀～9世紀代の整地層とその下層からピットなどの遺構が分布していることが判明したが、館が機能していた中世の遺構は検出されな

調査次数	調査面積(m ²)	調査期間	調査担当	調査成果	掲載報告書
1	100	1993.3.25~1993.3.31	塔島光司、池邊千太郎	館構築時に造成を行ったと考えられる版築状の積み土が確認できた。この層は、地底に沿って南側に下がる。遺物は、古代に帰属される土器片等が出土している。	大分市埋蔵文化財調査年報4－平成4年度－1993
2	100	1999.06.17~1999.09.30	坪根伸也、河野史郎他	枠形を含む現況の土墨が戦国期(16世紀後半)のものである可能性が高い。戦国期に先行するが時期不明の区画施設が確認できた。	第32集「大友府内1」(上野大友館／上原館跡)2000、大分市埋蔵文化財調査年報vol11 1999年度2000
3	60	1999.11.04	讃岐和夫、河野史郎他	水平堆積を示す古段階の積み土状遺構と16世紀後半に構築されたことが考えられる新段階の積み土状遺構が確認できた。	大分市埋蔵文化財調査年報vol11 1999年度2000
4	20	2000.04.17~2000.04.25	河野史郎、小住武史他	大きく3種類の積み土状遺構が確認できた。②③の積み土は出土した青磁碗から15世紀後半~16世紀前半に帰属でき、それらを覆うように①の16世紀後半の積み土が存在し改修の痕跡と考えられる。	大分市埋蔵文化財調査年報vol12 2000年度2001
5	60.7	2000.11.27~2000.12.12	讃岐和夫、後藤典幸	15~16世紀に比定される土墨を確認した。土墨の内部は、野面石が積まれその上面に版築状の土層堆積が見られた。土墨の下からは、9世紀後半~10世紀に比定される東西方向の溝跡が検出できた。	
6	25.4	2009.11.18~2009.11.20	佐藤道史、上原翔平	中世段階の可能性がある整地層、その下位より古代の整地層が確認できた。古代の整地層上面では、8世紀末~9世紀初頭の遺構を検出している。サブレンチからは、龍泉窯系青磁片が出土した。	大分市埋蔵文化財調査概要報告2010平成21年度版2010
7	6.3	2014.11.12	松浦憲治、小野綾夏	周辺の地形の高低差から、南北方向の堀の一部であることが考えられ、これまで想定されていた堀幅よりも西側に広がる可能性が高い。	大分市埋蔵文化財調査概要報告2015平成26年度版2015

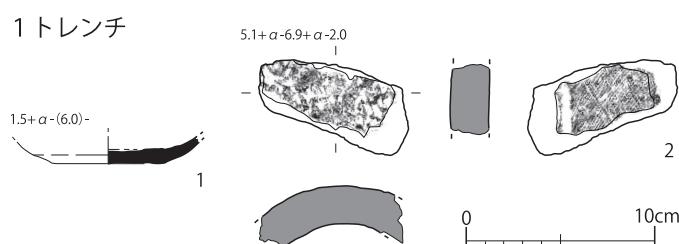
第3表 上原館跡のこれまでの調査



第25図 遺構配置図・遺構全体図(1/150)



第26図 調査区北壁土層模式図



第27図 出土遺物実測図(1/4)

かった。これまでの調査(第3表)では、館内的一部分で中世の整地層が確認できているほか、館の外郭部分のみが確認されているにすぎない。こうした事から、今後も館内部の状況を把握するために継続した調査が必要と考えられる。(小野)



調査区遠景（南より、上に別府湾を望む）



調査区全景（上が西）



調査区遠景（北より）



調査区全景（東より）



調査区全景（南東より）



調査区全景(反転後)(東より)



調査区全景(反転後)(北より)